

「目覚めよ勝利のために」を読んで

六年生

私が、この本を選んだ理由は、あまりサッカーについてふれたことがないからです。私が特に注目した文は、二つあります。

まず一つ目は、「ニッポン！ニッポン！」の大歓声がグラウンドの上の選手たちにもすごい力で降り注いだという文です。理由は、もし私がその選手たちだったら、きん張とプレッシャーで頭の中が真っ白になりそうだけど、日本代表チームは、九十分間冷静に全員にあたえられた役割を全力でこなし、こうげきと守備をくり返したのがすごいなと思ったからです。

二つ目は、「練習で魔法のようにボールをあつかえるだけでは、あるいは強いシュートを打てるだけでは、世界に通じるサッカー選手になることはできない。周囲の人々と心を通い合わせ、自分自身の考えや気持ち豊かに表現できる本物の『人間』にならなければ、困難にぶつかったときに、自分の力で乗りこえていくことはできない」という文です。理由は、自分一人の力ではどんな困難も乗りこえられないから、一人一人を大切に、周囲の人々と心を通い合わせ生きていくことが大切だと思ったからです。

私は、はば広く周囲の人と関わり合いをもちながら、自分を成長させていきたいと思いました。



「花のき村とぬす人たち」を読んで

六年生

【子】
私はこの話を読んで、かしらはこれから自分に正直に生きていったと思う。

かしらは子牛をあずけられたときに泣いていた。けれど、酒をのんだときに泣いていたのは泣きじょうごではなく、老人の役人が心の善い方で信用してくれているのを見て悲しくなったから泣いているのかと思った。

かしらは自分をはじめて信用されたと言っていたけれど、すでに四人の弟子がいたので、かしらはもともと信用されていたのかなと思った。自分も正直に生きようと思った。

【親】
この本を読んで感想を書くまで子どもは何度も読み返していました。おかしらは、なぜぬす人になったのか、淋しく生きていた人のように思った。人を見た目で判断するのは良くないよね、ただ身なりや身だしなみは日頃から気をつけようね、第一印象は大切だよねと親子で話をしました。

わらじをはいた子がどうしてぬす人のかしらに子牛を預けたのだろうか。ぬすみに入ろうとした村は心の善い人々の村、わらじをはいた子は村のおじぞう様だったようで、村の人に大切にされていたので人に親切にされたら自分も他の人に親切にしてあげるためにぬすみに入られぬよう子どもになりおかしらを美しい心に変えたのだと思います。おかしらも信用されて子牛を預けられ、誰かに初めて頼られて嬉しかったのだと思います。

子どもに頼られていいるから子育てや仕事を頑張れる、信頼されているので家庭や仕事を続けられる、人間社会において大切なことを再確認できるお話でした。

自分に正直に生きてほしいです。子どもが迷っていたら救ってやる親の役目を忘れず子育てしたいです。

【子】

ぼくは、この本でかんどうしたことが二つあります。

一つ目は、仏様がぬす人をしようじきものへとかえてくれたことです。村の人ともぬす人も助けているので、すごくかんどうしました。

二つ目は、かしらがとつてもすなおだったことです。おじいちゃんをだました時もすぐ本当の事をいいにいつていたので、仏様のおかげでもあるけど、すなおに自分からいつたところはすてきだとおもいました。

【親】

この本は、最初は、ぬすむことを悪いことと思わない、当たり前のように生活していた主人公が、ぬす人であるとな何の疑いも持たず子牛を預けてきた子どもと出会ったことで、その子どもの純粋な心に触れて、自然とその子どもの善い心に答えようと改心していく様子が描かれています。

人は、相手の悪い所について目がいきがちですが、良い所に目を向けて、それを認めて接していくと、お互いの関係がおだやかになっていくという人と人のつながりについて大切なメッセージが込められていると思います。

【子】

この話は、ぬす人になったばかりの四人と、かしらという四人の親方が、少年がかしらを信じ、牛をあずけたことで、ぬす人から、自分のしたことを全て白状し、もうぬす人に絶対ならないと決め、美しい心になった話です。

かしらが美しい心になったのは、ゆいいつ少年だけが、かしらはいいい人だと信じ、信用したからだと思います。

人を信じ、信用するのは大切なことだと思います。

【母】

大人が読むと心洗われるお話でした。人の優しさに触れたり、人から信じてもらえたりすることの喜び、大切な経験だと思えます。盗人のかしらはそんな喜びを小さな子どもから教えてもらい、なみだを流す場面が心に響きました。

本から学べることに、感じることはたくさんあるので読書をしっかりしてほしいなと思うのですが、スマホから得ていることの方が多い時代：じっくり登場人物の気持ちを考えながら、親子で話す良い時間となります。

「目覚めよ、勝利のために」を読んで

六年生

「目覚めよ、勝利のために」には、フィリップ・トルシエという人が出てきます。この人は日本代表監督で、日本サッカー協会からワールドカップでベスト十六に入るチームを作ることを望まれました。そして実際に日韓ワールドカップでベスト十六への進出をはたしたお話です。この本で気になったところは、日本の場合には「あたえすぎ」だと、トルシエは思ったところだと思います。ここが気になった理由は、私も日々の生活の中で不自由だと感じる経験をあまり感じたことがないからです。トルシエ監督はユース代表にブルキナファソ遠せいを通して刺激をあたえ成長していきました。私も何でも親や周りの人達にやってもらって、ほしいものをあたえてもらえばかりではなく、自分自身で「やってみる」ことを増やし、自主的に動けるようになりたいと思いました。

また、印象に残った場面はトルシエ監督がユース代表を孤児院に連れて行ったところです。選手たちにはサッカーですが、私の今の環境がどれだけぐまれているのかということを理解し、自分で「やりたい」と始めたことに対して、もっと真摯に取り組もうと感じたと同時に、もっと多くのことを学び、様々なことを実際に経験し、人間として成長したいと思いました。

この本を読み終わって、私は勉強以外にも多くのことを知り、学ぶことの大切さがわかりました。これからはそのことを意識し、日々の時々をもっと大切に生活していきたいと思います。

「花のき村とぬす人たち」を読んで

六年生

【親】この話を読んで何を感じた？

【子】かしらは今まで、人から冷たい目ばかり見られてきたけど、男の子に子牛をもらって、自分のしていることがわるい事だと気づき、「すまねえが、おまえら、手分けして、預けていった子どもを探してくれねえか？」と、かしらの心がどんどん変わっていつか、最終的には、ぬすみをやめようと決心出来ていて、かしらはすごいなと思った。

【親】世の中には、善い人と悪い人がいるけど、「人の本性は先天的に善である」とする性善説にふれて、どの様に自分の生活に活かせると思っただか？

【子】出来るだけ、自分から進んで先に相手にいい事をしようと思った。

【親】パパはこの本を読んで何を感じた？

【子】善い事や人を信じる事の先出しは、人の心を大きく変える「力」があるよね。

【親】そうだね。